

カントと構想力の理説

澁谷 久

カントはいくつかの著作で構想力の問題を論じている。われわれが、彼の標榜する先験的哲学の核心に触れようとするとき、構想力の問題は避けることのできないものである。ところで、構想力(Einbildungskraft)の構想(Einbildung)の本質はBildungにあり、Bildungは形成を意味する。形成とは形を成すことであり、形を成したものがすなわち形象(Bild)である。したがって構想力の問題は形象の問題でもあり、構想力の理説は形象の理説でもある。形象を形成する力がまさに構想力である。

さて、カントのいう構想力の系譜を辿ってみるに、それはバウムガルテン⁽¹⁾に由来する。バウムガルテンは上級認識能力に知性(intellectus)を配し、下級認識能力として次のごときものを認めた。(1)感覚(sensus)、(2)空想(phantasia)、(3)識別力(perspicacia)、(4)記憶(memoria)、(5)創作能力(facultas fingendi)、(6)予見力(praevisio)、(7)判断力(judicium)、(8)予期力(praesagatio)、(9)表示能力(facultas characteristica)がすなわちそれである。ところで、カントによれば、構想力は実際の知覚から独立して対象の表象を作り出す能力である。彼は次のようにいう。「構想力(facultas imaginandi)とは、対象が現前していなくても直観をなしうる能力であって、生産的であるか再生的であるかのいずれかである⁽²⁾。」あるいはまた「構想力は、対象を、それが現前していなくても直観において表象する能力である⁽³⁾。」現に存在しない対象は、すでに存在した対象であるか、まだ存在しない対象であるかである。現に存在しない対象を表象しうる能力は、もちろん現に存在

する対象をも表象することができる。感官(Sinn)は現に存在する対象に関係する。のちに明らかになるであろうが、これらの引用文にはすでに感官の能力を構想力という能力の一部分と看なす考えが含まれている。カントの考えからすれば、バウムガルテンにおける感覚(sensus)もカントのいう構想力の作用に関与しうるといえる。

ところで、カントは識別力の機能を判断力の機能の一つと看なして、識別力を判断力(Urteilkraft)に包含させた。バウムガルテンでは判断に関する能力は下級認識能力に属するとされたが、カントはそれを上級認識能力と看なした。悟性ならびに理性を知的な二大認識能力と看なすことが、長い間、哲学の伝統であったが、カントは知的な認識能力に判断力を加えて、その地位を高めた。また、彼は予期力を予見力に包括し、それらを一つの能力と看なした。先に見たごとく、構想力は、対象が現前していなくても、それを表象する能力である。それ故にカントの構想力は、バウムガルテンのいう次のごとき諸能力を含むことになるであろう。それはすなわち(1)感覚、(2)空想、(3)記憶、(4)創作能力、(5)予見力、(6)表示能力である。このことからすれば、構想力は単純な能力ではなく、いくつかの特殊な能力を包含するものである。『実用的見地における人間学』もおおむねこのような見解をとっている。しかるに、『純粹理性批判』では構想力は単純な能力であるかのごとくに論じられ、それはせいぜい「生産的構想力」と「再生的構想力」との二つに分けられている。思うに、このことはカントの先験的構成主義から出てくる必然的な帰結である。形象の構

成ないしは形成という点からすれば、構想力をこのように二つに分けることで、十分に事が足りるのである。先験的論理学の立場からすれば、経験の構成における認識論的根拠が問題になるのである。ところが、『人間学』では認識論的根拠を踏まえて、現実に見られている構想力の姿が問題にされている。ここでは、構想力は主として「経験的心理学」的に問題にされている。

それでは、構想力の分類における「生産的」・「再生的」ということは、いかなることを意味するのであろうか。「生産的」といっても、それは全き無からの生産を意味するのではない。「生産的構想力は……必ずしも創造的ではない。すなわち、あらかじめ私たちの感官能力に与えられることが決してなかったような感官の表象を作り出すことはできない。人びとはその構想力の素材をつねに指摘することができるのである⁽⁴⁾。」総じて構想力は形成力 (bildende Kraft) である。しかし、生産的構想力は対象を根源的に描出する能力であり、その描出 (Darstellung) は経験に先行する。描出作用は通常、悟性規則に従ってなされ、描出作用による表象は悟性概念を適用されて、経験に到るものである。したがって生産的構想力の働きは未来を指向する。しかるに、再生的構想力は対象を派生的に描出する能力であって、この描出は過去の経験的直観を心性 (Gemüt) にとり戻すものである。経験的直観は、対象に関する概念と結合して初めて一つの経験となるのである。このように再生的構想力は過去を指向する。それ故にカントは再生的構想力を回想的 (zurück-rufend) なものとも称している。

両構想力には以上のごとき差異がみられるが、現実には両者が全く別々に作用するものではない。われわれが未来を予想する場合には、現在の時点に立ちながら過去の事象に思いを致し、過去に予想の基準を求める。また、過去の回顧は現在との比較においてなされる。過去と未来を結ぶものはまさに現在である。構想力は過去・現在・未来を貫く、表象の能力である。

形成力としての構想力は形成能力 (Bildungsvermögen) とも呼ばれる。この形成能力は (1) 現形成 (Abbildung) の能力、(2) 追形成 (Nachbildung) の能力、(3) 先形成 (Vorbildung) の能力

からなる。現形成の能力は現在の表象に関係するものであり、個々の感覚 (Empfindung) から一つの形象を作りあげるのである。『純粹理性批判』の先験的分析論で覚知の総合 (Synthesis der Apprehension) と名づけられるものは、個々の感覚から統一的に形成される知覚 (Wahrnehmung) の段階でなされるのである。ところが、追形成の能力は記憶に保存されている表象を呼びもどし、これを現実の知覚に結合させる能力である。カントは次のようにいう。「これ※によって心性は過去の感官の表象を近づけてこれを現在の表象と結びつけるのである。私は連想によって過去の諸表象を再生するのであるが、この連想に従って、一つの表象が他の表象の下に引き寄せられる——というのは一方が他方と同伴関係にあったから——のである。これが想像 [Imagination] の能力である⁽⁵⁾。」想像の能力によってなされるものは、『純粹理性批判』における再生の総合 (Synthesis der Reproduktion) に相当すると考えられる。次に先形成の能力が問題になるが、これは未来の表象を形成する能力である。ここで未来の表象を形成するといっても、それは創造を意味するものではない。過去の表象と現在の表象との関係を抛り所とし、現在の表象に照らして未来の表象を形成するのが、先形成の能力である。構想力のこのような分類はまさしく時間を基準にしてなされたものである。構想力の三能力とバウムガルテンにおける下級認識能力との関連を指摘すれば、次のようになる。すなわち、現形成の能力は感覚に、追形成の能力は記憶に、先形成の能力は予見力にそれぞれ極めて深い関りを有する。

ところで、構想力は時間においてその能力を発揮するが、それだけで終るものではない。それはまた空間的な広がりにおいて対象の表象を形成するものである。カントはこのことをも考慮して構想力の分類を試みている。それによると、構想力は (1) *Einbildung*⁽⁶⁾ の能力、(2) *Gegenbildung* の能力、(3) *Ausbildung* の能力の三つになる。*Einbildung* の能力は対象の現実性から独立して、形象を自己自身から作り出す能力である。建築家がまだ見たこともない家を作り上げる場合のように、ここでは形象は経験から借りてこられないのである。この能力は空想 (Phantasie) の能力と

も呼ばれる。*Gegenbildung* の能力は特性描写の能力であり、*Gegenbildung* は他の事物の形象を作り出す手段である。したがって言葉というものは事物の表象を作るための、事物の *Gegenbild* である。ところで、われわれは形成される形象を完全にしようとする能力のみならず、その衝動をも有する。この能力は *Ausbildung* の能力といわれるものであり、個々の対象を全体の理念と比較するのである。

以上で、われわれは時間的な要素以外のものをも考慮して構想力を分類したが、このことに関連して、われわれは先に述べた生産的構想力と再生的構想力について改めて論じてみたい。

現実的な知覚は一定の時間・空間と結合しているが、構想力には必ずしもそのような結合がみられない。現に存在しない対象をわれわれの意識にもたらすところに、構想力の本領がある。すでに論じられたごとく、現に存在しない対象は未来に存在する対象であるか、過去に存在した対象であるかである。したがって構想力は二つの方向に作用するものである。まだ知覚されない対象の形象を構想力が作り出すとき、構想力の作用は生産的と称される。たとえば天才は生産的構想力のなせる業である。およそ天才は模倣精神と相容れないものである。ところで、過去の形象を構想力が現在に呼びもどすとき、それは再生的構想力と称される。それは追形成的 (*nachbildend*) であり、模倣と記憶の基礎に横たわっている。『人間学』では、対象を根源的に描出するか、派生的に描出するかによって、構想力が分類され、構想力は前者の場合には生産的であり、後者の場合には再生的である。『純粋理性批判』では、構想力は自発的である限り、生産的構想力と称され、その作用は先験的なものとされるが、これに反して再生的構想力にあってはその作用は経験的なものとされる。しかして再生的構想力の総合は経験的法則すなわち連想の法則に従うのである。先にも触れたごとく、『純粋理性批判』の立場は先験的であり、『人間学』の立場はおおむね経験的心理学の立場である。それがために構想力についての見解は両著作において必ずしも同じではない。『純粋理性批判』では、先天的認識の可能性を明らかにするという視点から、構想力に関する論述がなされて

いる。しかるに、『人間学』では、まさに心理的事実を説明するという立場から、構想力に関する論述が展開されている。純粹悟性概念の演繹では権利の問題 (*quid juris*) と事実の問題 (*quid facti*) とが明確に区別されているが、構想力に関しても両者が区別されていると考えられる。

ところで、『形而上学講義』では、形成力 (構想力) は有意的 (*willkürlich*) に作用する場合には上級認識能力に属し、無意的 (*unwillkürlich*) に作用する場合には感性に属する、とされている。ここでいう上級認識能力は悟性と解されるべきである。三木清も『構想力の論理』でそのように解している。ここでいう悟性はバウムガルテンの *intellectus* に相当する。構想力は感性と悟性とに介在する中間的な能力であるとしばしば解されているが、むしろ両者の機能を有しうる能力と解されるべきである。さらにまた、『形而上学講義』では記憶は有意的な想像 (*Imagination*) ないしは追形成の能力とされ、有意的な *Einbildungsvermögen* (*Vermögen der Einbildung*) は創作能力 (*Dichtungsvermögen*) とされている。このように構想力に関するカントの論述は誠に煩雑である。しかし、先験的論理学の立場に立つにせよ、経験的心理学の立場に立つにせよ、構想力それ自体は同じものであり、何ら異なるところがない。二つの立場をうちに含む一層包括的な立場が可能であるならば、構想力について、おそらく統一的な説明がなされるであろう。

「構想力は、それが意欲せずとも構想を生ずるかぎりにおいては、空想と呼ばれる⁷⁾。」また、カントでは構想力は無意的に作用する場合は感性に属するとされる。したがって空想は感性に属すると解される。感官はもちろん感性に属する。ところで、現形成 (*Abbildung*) の能力は現在の表象に関係するが、これはバウムガルテンの *sensus* に相当し、感官と看なされる。現在の表象は時間の推移にしたがって過去へ繰り込まれ、過去の表象となる。われわれは記憶によって過去の表象を取り出し、連想によって、それを現在の表象と結合する。したがって記憶は追形成 (*Nachbildung*) の能力である。記憶によって、われわれは現在の表象と過去の表象との関係を把握することができるのである。ところが、われわれは、さらにこの

関係を基礎にして現在の表象から未来の表象を形成しようとする。このような表象を形成する能力は先形成(Vorbildung)の能力であり、これは有意的な生産的構想力とされる予見能力(Vorhersehungsvermögen)である。

カントは『形而上学講義』のある箇所で、形成力としての構想力は実際には感性に属するとしているが、また同書の別の箇所で、形成力はその作用が無意的な場合に感性に属し、それが有意的な場合には上級認識能力に属するとしている⁽⁸⁾。文字通りに理解すれば、カントの論述に多少の不整合が見られることになる。この不整合は見かけ上の不整合なのか、それとも真の不整合なのか、ここで問われなければならない。この不整合の問題を解決するには、われわれは、三分法の基礎になっている時間について考えてみなければならない。時間は空間と並んで直観の形式である。範疇が悟性の形式であるように、時間・空間は感性的直観の形式である。しかもカントでは空間よりも時間の方が一層根源的である。このことは、彼の図式(Schema)の考えからしても明らかである。図式は空間と関りをもつ時間直観にその本質を有する。それは生産的構想力の所産である。構想力の本来の領分が時間にあることを強調するあまり、カントは有意・無意の区別なく構想力は実際には感性に属しているとしているのである。この点は『純粹理性批判』における構想力の説明に極めて類似している。

すでに触れたごとく、『形而上学講義』では、時間以外の要素をも考慮して構想力は三分されている。(1)有意的な *Einbildungsvermögen* は創作能力とされている。(2) *Gegenbildung* の能力はバウムガルテンの *facultas characteristica* に相当するものであり、これは表示能力(Bezeichnungsvermögen)にほかならない。(3)次に *Ausbildung* の能力であるが、これは誠に理解に困難な能力であり、三木清はこれをバウムガルテンの *phantasia* に比較することができるとしている⁽⁹⁾。カント自身においても *Ausbildung* の能力には前二者とは異なる位置が与えられている。カントは好んで三分法を用いたが、*Ausbildung* の能力も、多分に、形式を重んずる彼の三分法という要請から出てきたものであろう。カントにおいて多く用

いられている分類法は二分法ないしは三分法であるか、あるいはそれらが基礎になっているものである。このことは時間・空間の本性に由来すると、私は解したい。カントは時間という視点から認識能力や認識の対象を区分し、さらにそれに空間的な関係をからませている。それ故にカントの論述は煩雑にみえるのである。しかし、彼の時間・空間という視点を十分に考慮して彼の論述の内容を分析すれば、それは意外に明確になることが多い。

次に、われわれは、今までに分類した構想力の諸能力の主要なものを具体的に考察することにする。『人間学』によれば、構想力は創作的(*dichtend*)であるか、回想的(*zurückrufend*)であるかである。前者は生産的とも称され、後者は再生的ともいわれるものである。再生的構想力は過去の表象に関係するから、記憶は再生的構想力に属すると解されるのが普通である。Vladimir Sataraもカントの構想力を分類して、再生的構想力は記憶であるとしているが⁽¹⁰⁾、以前の表象を有意的に再生しようところに記憶の特質がある。記憶は「有意的」という点で空想とは大きな違いがある。「記憶の最も重要な課題は以前の表象を意識的に呼び出すことにある⁽¹¹⁾。」記憶には三つの段階がある。把握(*Auffassung*)、把住(*Aufbewahrung*)、想起(*Erinnerung*)がすなわちそれである。「何かあるものをすぐ記憶に把え、それをたやすく思い出すようにつとめ、そしてこれを長く保存することは、記憶の形式的な完全性である。これらの諸特性はしかし滅多に共存していない⁽¹²⁾。」つまり、これら三つの特性を共に有する人間は、現実には極めて稀である。

記憶が再生的構想力に属するのに対して、空想は生産的構想力に属する。記憶が有意的であるのに対して、空想は無意的である。それ故に空想にあっては、形象がわれわれと戯れ、われわれは形象に操られている。「構想力は、それが意識せずとも構想を生ずるかぎりにおいては、空想と呼ばれる⁽¹³⁾」。空想は経験の諸法則に従ってなされることはない。空想家とは、空想を経験と看なす習慣のある人のことである。夢は空想の一形式である。

さて、生産的構想力には有意的な戯れもあり、

これがすなわち創作能力である。創作能力は過去の表象を現在にもたらしめるのではなく、新しい表象を生み出す能力である。創作能力は新しい表象を意図的に作り出す能力である。『人間学』では、創作能力について次のようにいわれている。「感性的創作能力には三つの異なった種類がある。これは、空間における直観の形成的能力（形成構想 *imaginatio plastica*）、時間における直観の連想的能力（連合構想 *imaginatio associans*）、および表象相互が共同の起源をもつことからする親和の能力（親和力 *affinitas*）である⁴⁴。」第一の能力は空間における形象の形成ないしは図形の構成にかかわるものであり、一般に芸術的創造の多くはこの能力に負うのである。第二の能力は時間における表象の結合に関与するものであり、この表象の結合に働く法則は連想の法則である。第三の能力は、様々な表象が共通のものに由来すると看なされる場合の、結合の能力である。「多様なものの連想の可能性の根拠は、それが客観の中に横たわっている限りにおいて、多様なものの親和性と呼ばれる⁴⁵。」三木清も示唆するごとく、『人間学』におけるこれら三種の感性的創作能力は『形而上学講義』の現形成の能力、追形成の能力、先形成の能力に対応すると解される。しかしカントにあっては、先験的哲学の重要な問題の一つは主観の認識能力である。『形而上学講義』においてすらも構想力が問題になっているのは、認識および認識能力という観点からである。

次に、われわれは予見能力を論ずることにする。予見能力とは、あらかじめ企画的に何か未来的なものを表象する能力である。その限りにおいて、それは記憶の対極をなす。想起能力と予見能力についてカントは次のごとくにいう。「両者は、それらが感性的なものであるかぎり、主観の過去や未来の状態の表象を現在の状態と連合させることにもとづいている。そしてそれ自身は知覚ではないが、それらは、もはや無いものをまだ無いものと、現在あるものによって、一つの脈絡をもった経験のうちで結合するという、時間のうちにおける知覚の結合に役立つ。これは回想 (*Respienz*) と予想 (*Prospienz*)（もしもこういう表現が許されるなら）の想起能力および予言能力とい

われる。それは人びとが自分の表象を、過去かあるいは将来の状態において見いださるべきだったようなものとして、意識しているからである⁴⁶。」われわれが過去を回顧する場合に、その意図は、しばしば、それによって未来の予見を容易にしようとするところにある。予見能力とそのあらゆる特殊な形すなわち予感 (*Ahndung*)、予期 (*Vorerwartung*)、占いによる予言 (*Wahrsagen*)、神託による予言 (*Weissagen*) は未来の事象がどのように進行するかを確実に言い当てようとするものである。

予感はまだ現前していないものに対する潜在的な感覚を示す。ところが、感覚とは、本来、現在のなものに関する感覚であり、まだ存在しないものに関する感覚は成立しないのである。したがって予感は幻想にすぎない。予期は未来のものごとについての意識であるが、この意識は因果律に関する反省によって生ずるのである。予言については、カントは次のように述べている。「普通の予報 (*Vorhersagen*) と占いによる予言と神託による予言とはつぎの点で区別される。すなわち第一のものは経験法則にしたがっての予見（したがって自然的）であり、第二のものは既知の経験法則に反する（反自然的な）ものであり、第三のものは自然と区別された原因からの暗示（つまり超自然的）であるか、さもなければ暗示とみなされるものである。この暗示の能力は、神の影響にもとづくと思われるのだから、本来の予言能力 (*Divinationsvermögen*) ともよばれる（なぜならば非本来的には、将来のものについてのあらゆる明敏な推測がやはり予言とよばれているのだから⁴⁷。」）総じて予見は因果律に基づく場合にのみ確実性を有するのである。因果律に基づかない予見は単なる経験に基づくものであるか、さもなければ何ら根拠のないものである。しかし、根拠のない予見でも、軽視できない場合がある。たとえ根拠のない予見であっても、それは時にはわれわれの人生に何らかの意味で少なからざる影響を及ぼすものである。

次にわれわれは表示能力を問題にしたい。カントによれば、「予見されたものの表象を過去のものの表象と結合する手段として、現在あるものを認識する能力は表示能力である。——この結合を

生ずる心の活動が表示 (signatio) であって、それはまた記号化ともいわれ、そのうちで程度の最大のものが特記とよばれる⁹⁹。表示能力の問題は記号化の問題である。カントは記号を (1) 有意的な記号 (人為記号)、(2) 自然的な記号および (3) 不可思議のしるしに分類している。

有意的な記号は八つに分類されるが¹⁰⁰、その中で文字は極めて重要な役割を果たしている。われわれは文字と象徴とを区別しなければならない。象徴は何か直観的な形態を有するが、文字は必ずしも直観的な形態をもたない。文字は間接的な記号であり、そのいくつかが組み合わさって直観的な形態になるのが普通である。また、文字は直観を介して概念を示すものとなる記号にほかならない。文字について、カントはこのように考えている。もちろん、彼の場合には、考察の対象はヨーロッパの文字である。いずれにせよ、文字に附随して問題にされる象徴的認識は直観の可能性において成り立ち、それ故に象徴的認識に対立するのは直覚的認識 (intuitive Erkenntnis) ではなくして、比量的認識 (diskursive Erkenntnis) である。比量的認識は概念による知性的認識ともいわれる。象徴は悟性にとっては手段である。悟性は概念の能力であり、一般に概念は言葉によって表現される。次に問題になるのは自然的な記号であるが、時間という観点からみれば、表記される事物に対するこの記号の関係は、(1) 現示的 (demonstrativ)、(2) 追憶的 (rememorativ)、(3) 予知的 (pragmatisch) である。また、不可思議のしるしについてはカントは次のようにいっている。「……天空におけるしるしや不可思議、すなわち彗星とか、高空を疾走する光の球、北極光、のみならず日蝕や月蝕でさえもが、この種の数多くのしるしがとりわけいっしょに現われ、しかもかたて加えて戦争とか疫病等々がそれにとまったりすると、それに驚愕した大衆には、もはや遠からず訪れる最後の審判の日とこの世の終末とを予告すると思われるような事物となる¹⁰¹。」

今までわれわれは構想力を様々な角度から論じてきたが、構想力の定義はもとより、その個々の能力の定義すらも一義的にはほとんど不可能に近い。思うに構想力は、『純粹理性批判』でも明ら

かなように、悟性と感性とを媒介する能力である。それは一方において悟性的な性格を有するが、他方において感性的な性格を有する。『純粹理性批判』では先験的哲学の立場から、直観の形式である時間・空間と悟性概念である範疇を斟酌して、構想力の説明がなされているが、この説明は多分に形式的な面に偏している。しかるに、『人間学』では経験的心理学の立場から、構想力の現に在る姿がとらえられている。しかれば、構想力は人間の心的能力の中でどのような位置を占めるのであろうか。この問題を解明するには、先ず悟性、判断力、理性について考察し、構想力がこれらの能力とどのように関連しているかという点から、論述を進めなければならない。

カントでは一般に受容性の能力として感性が挙げられ、これに対し自発性の能力として悟性が挙げられている。しかし、悟性という概念は多義的である。例えば『人間学』では次のように述べられている。「認識の能力が一般に悟性と（その言葉の最も普遍的な意味において）いわれるべきであるならば、悟性はそのうちに、対象の直観を生ずるためには与えられた表象の把捉能力 (attention) を、対象の概念を生ずるためには多くのものに共通なものの分離能力 (abstractio) を、そして対象の認識を生ずるためには反省能力 (reflexio) をふくまなくてはならないということも、確かに人びとの認めるところである¹⁰²。」このように悟性が人間の認識の全能力を示す場合もあるが、このような場合は極めて稀である。しかし、これを全く無視するわけにもいかないであろう。

カント哲学でしばしば現われる悟性は、感性に対立した悟性である。総じて、感性が感性的認識能力と称されるのに対して、悟性は知性的認識能力と称される。カントは前者を下級認識能力、後者を上級認識能力と名づけている。「前者は感覚のための内的感官の受動性という性格をもち、後者は統覚の自発性という性格をもつ。すなわち後者は、思考を形作り論理学 (悟性の規則の体系) に属する活動のための、純粹意識の自発性という性格をもつ。ちょうど前者における内的感官が、心理学 (自然法則のもとにおける、あらゆる内的知覚の総括) に属して内的経験の基礎をなしているのと同じように¹⁰³。」この引用文からも明らかで

あるが、カントにあっては一般に悟性的なものは論理学の対象なのである。彼の目ざす論理学はもちろん先験的論理学である。これとは対照的に感性的なものは彼にあっては心理学の対象である。ここでいう心理学は経験的心理学である。このように感性的なものと悟性的なものとの相違が見られるが、この相違が、構想力をめぐって様々な問題を投げかけるのである。論述における混乱を避けるために、われわれは上級認識能力全般をさす悟性を広義の悟性と称することにしよう。

ところで、上級認識能力が悟性・判断力・理性の三つから成るとされる場合がある。カントは次のごとくにいう。「……悟性という言葉は特殊な意味にも受けとられることがある。というのはすなわち、悟性の区分の一項としては他の二者とともに、一般的な意味の悟性に従属せしめられているからである。かくて上級の認識能力は（実質的に、すなわちそれ自身としてだけでなく、対象の認識へ関係づけて考察されると）悟性と判断力と理性とから成り立つことになる²³。」このように上級認識能力を三分した場合に、悟性には規則の能力が配され、判断力は普遍的なもの（規則）に対して特殊なものを発見する能力とされ、「理性とは普遍的なものから特殊なものを導き出し、かくして後者を原理にしたがい、必然的なものとして説明する能力である²⁴。」『純粹理性批判』でも認識能力の様々な区分がみられるが、上級認識能力を三分する仕方もみられる。この場合には、悟性は概念の能力ないしは規則の能力であり、判断力は判断の能力であり、理性は推論の能力である、と説明されている。しかし、『人間学』の場合にせよ、『純粹理性批判』の場合にせよ、上級認識能力に関するこのような説明は、結局、同じことをいっていることになる。判断は概念相互の関係を表わすものであり、推論は判断相互の関係を表わすものである。しかして「正しい悟性、熟練した判断力および透徹した理性は、知性的な認識能力の全範囲を形作る²⁵。」このように上級認識能力が三分された場合の悟性を、私は狭義の悟性と称する。ところが、カントは悟性に判断力を包含させて、全認識能力を感性・悟性・理性とすることも時にはある。悟性の問題については、別の機会に論じたいと思う。

このようにカントでは悟性という概念は多義的であり、それを一義的に定義することは不可能である。構想力を一義的に定義することが不可能であるのも、一つには悟性の一義的定義の不可能性に由来するのである。構想力は感性とこのように一義的定義の不可能な悟性との媒介者であり、両者の性質を共に有するとされるから、構想力をめぐる問題が困難を極めるのである。

構想力は感性的であると同時に悟性的であるとされたが、われわれは、このことをさらに詳細に検討してみたい。認識能力における構想力の位置づけが、カントの場合にどのようなものであるかを明らかにするのは、かなり困難であるが、このことは、彼がバウムガルテンの考えを継承しながらも彼独自の考えをそれに織り込んでいることに由来する。バウムガルテンでは上級認識能力とは *intellectus* のことであり、これには判断に関する能力は含まれていない。判断に関する能力は下級認識能力に属するのである。判断に関する能力は *perspicacia* と *judicium* とである。ところが、カントではこれら両能力を包括するものとして *Urteilkraft* が考えられ、これは上級認識能力に属するとされた。バウムガルテンの下級認識能力から判断に関する能力を取り去った残りの部分がカントの構想力に相当するのである。『形而上学講義』によれば、下級認識能力に対応する認識は感性的認識であり、上級認識能力に対応する認識は知性的認識である。しかして、さらにカントは感性的認識を二分している。その一つは対象の印象から来る感官 (*Sinn*) 自身の表象であり、他は心性から来る形成力の認識である。バウムガルテンの *sensus* はおおむねカントの感官に相当するが、カントでは感官と形成力 (*bildende Kraft*) を包括した上位概念が感性 (*Sinnlichkeit*) なのである。『形而上学講義』によれば、形成力とは構想力にほかならない。構想力が形成力と呼ばれるのは、それが対象の表象を形成するからである。形成力は感性に属する。感性に対立する悟性は思惟力 (*denkende Kraft*) である。

上述のことからすれば、構想力がいかなる意味においても下級認識能力に属することは、明確である。ところが、形成力（構想力）は、その作用が無意的な場合には感性に属するが、それが有意

的な場合には上級認識能力に属すると、カントはいつている。有意的に作用する形成力が上級認識能力に属するとカントがしたのは、必ずしも彼自身の独創的な見解ではないであろう。バウムガルテンにあっては、上級認識能力である知性には、知的である限りでの予見能力、表示能力、推論能力などが含まれている。ところで、カントは予見能力や表示能力をも構想力という上位概念に包含せしめている。これらの事柄から推察すれば、構想力は上級認識能力にも属すると考えられる。構想力は受容的な面と自発的な面とを有する。ここで、われわれはカントの次のような言葉を想起する。すなわち「……人間の認識には二つの幹がある。それらは恐らく一つの共通の、しかしわれわれには不可知的な根から生じたもので、感性と悟性とである。前者によってわれわれに対象が与えられ、後者によってそれが思惟されるのである⁹⁹。」感性と悟性とに共通の根は両者の性格を同時に有するものであろうが、過去のカント研究でなされたごとく、われわれはこの根を構想力と看なしてはどうであろうか。構想力が感性と悟性とに共通の根であると推測しても、われわれは大きな過誤を犯すことはないであろう。構想力は二つの性格を有するが、受容性の性格を感性が受け継ぎ、自発性の性格を悟性が受け継いだとみることができる。

今までの論述からすれば、構想力は、それが受容性の能力と看なされる限り、先験的感性論に属し、それが自発性の能力と看なされる限り、先験的論理学に属するであろう。だが、『純粋理性批判』の先験的感性論では構想力は何ら問題にされていない。何故にこのようであるかが問われなければならないが、それはカントの批判主義の性格に起因するものである。認識および認識能力に対する批判では、問題であるのは、いわゆる事実問題ではなくして権利問題である。したがって先験的感性論といえども感官の能力が第一の問題であるのではない。それは副次的な問題である。先験的感性論で第一に問題になるのは、感性的直観の形式である。感性の先天的原理に関する学が先験的感性論である。感官そのものの問題はカントにあっては経験的心理学に属する。それは事実問題である。しかしてカントにあっては、批判の重点は

先験的感性論よりもむしろ先験的論理学にある。

カントは、感性と悟性は一つの共通の根から出たものであろうと推測しながら、感性的能力と知性的能力とを峻別した。前者は経験的心理学の対象であり、後者は先験的論理学の対象である。先験的論理学は経験的心理学から自由でなければならない。先に触れたごとく、構想力は有意的に作用する場合には上級認識能力に属し、無意的に作用する場合には下級認識能力に属する。それ故に構想力は先験的論理学の対象でもあり、また経験的心理学の対象でもある。『純粋理性批判』では構想力は主に先験的論理学の対象として論じられている。しかるに、『人間学』、『形而上学講義』では構想力は経験的心理学の対象として扱われている。心理学の主要な方法は観察であり、論理学の方法は分析と演繹である。心理学と論理学はその対象においても異なる。だが、両者が相補的に関連し合って初めて構想力の統一的全体像が描き出されるであろう。構想力が学の対象として二つの異なった立場から考察されるとしても、構想力そのものは、それ自身では一つである。構想力にあっては諸々の機能が統一的全体をなして、その本質を構成しているのである。このような構想力は、実は単なる論理学の対象でもなければ、また単なる心理学の対象に終るものでもない。構想力は論理と心理の接点に存在する。それは論理学の対象としては多分に非合理的なものを含み、心理学の対象にしては余りにも合理的である。合理と非合理を自己の構造契機とする構想力は、心性の深みに隠れた誠に不思議な力である。論理と心理の接点にその座を有する構想力の統一的な全体像を照らし出すことは、われわれの今後の課題である。

註

- (1) 本論文全体を通じて、バウムガルテンに関する事柄については、次の著作に負うところが少なくない。

○Vladimir Satura, Kants Erkenntnispsychologie in den Nachschriften seiner Vorlesungen über empirische Psychologie: Kantstudien, Ergänzungshefte, 101.

○三木清『構想力の論理 第二』(岩波書店)

- (2) 『カント全集』(理想社) 第14巻 93ページ(『人間

学』)。(ページ数の次にあるのは、引用文のある著作名である。『人間学』とは『実用的見地における人間学』のことである。以下同様。)

- (3) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 151.
- (4) 『カント全集』(理想社) 第14巻 93ページ (『人間学』)。
- (5) カール・ペーリツ編『カントの形而上学講義』甲斐実道、斎藤義一訳 (三修社) 146ページ。※——
追形成の能力をさす。(以下、本書を単に『形而上学講義』と表わす。)
- (6) 文脈からも明らかなように、カントでは Einbildung そのものに広・狭の二義がある。これは狭義の Einbildung である。いわゆる Einbildungskraft の Einbildung は広義の Einbildung である。
- (7) 『カント全集』(理想社) 第14巻 93ページ (『人間学』)。
- (8) 『形而上学講義』145——148ページ参照。
- (9) 三木清『構想力の論理 第二』(岩波書店) 71ページ。
- (10) Vladimir Satura, Kants Erkenntnispsychologie in den Nachschriften seiner Vorlesungen über empirische Psychologie: Kantstudien, Ergänzungs-

hefte, 101, S. 113.

- (11) Ibid., S. 133f.
 - (12) 『カント全集』(理想社) 第14巻 115ページ (『人間学』)。
 - (13) 同全集 同巻 93ページ (『人間学』)。
 - (14) 同全集 同巻 103ページ (『人間学』)。
 - (15) Kant, Kritik der reinen Vernunft, A 113.
 - (16) 『カント全集』(理想社) 第14巻 115ページ (『人間学』)。
 - (17) 同全集 同巻 123ページ (『人間学』)。
 - (18) 同全集 同巻 127——128ページ (『人間学』)。
 - (19) 同全集 同巻 130ページ (『人間学』) 参照。
 - (20) 同全集 同巻 132ページ (『人間学』)。
 - (21) 同全集 同巻 47ページ (『人間学』)。
 - (22) 同全集 同巻 51ページ (『人間学』)。
 - (23) 同全集 同巻 136ページ (『人間学』)。
 - (24) 同全集 同巻 140ページ (『人間学』)。
 - (25) 同全集 同巻 138ページ (『人間学』)。
 - (26) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 29.
- ◎ 訳文中、原文でゲシュペルトの部分は点「・」で示した。